

目次

市民憲章運動推進第42回全国大会開催要領	13
全国大会式次第	15
市民憲章運動推進第42回全国大会 誌上再現	
開会のことば	全国市民憲章運動連絡協議会副会長 小野山利雄 16
主催者あいさつ	全国市民憲章運動連絡協議会会長 室山 貴義 17
開催地市長歓迎のことば	倉敷市長 古市 健三 18
来賓祝辞	岡山県知事 石井 正弘 19
	倉敷市議会議長 秋山 正 20
分科会報告	
環境問題	福知山市市民憲章推進協議会副会長 谷垣 修身 21
まちづくり	計画哲学研究所所長 三輪 真之 23
市民憲章運動	財団法人あしたの日本を創る協会理事長 高岡 完治 25
大会オープニング	
女声合唱組曲「倉敷の四季」倉敷コール・クライネ	27
記念講演	
「宇宙から見た地球環境」NHK解説主幹 室山 哲也	29
大会宣言文	43
次期開催地あいさつ	福知山市副市長 山段 誠 44
	全国大会福知山大会実行委員長 前田 秀和 45
お礼のことば	財団法人あしたの日本を創る協会理事長 高岡 完治 47
閉会のことば	全国市民憲章運動連絡協議会顧問 三田 望 48
分科会 誌上再現	
環境問題	50
まちづくり	81
市民憲章運動	108
全国大会交流交歓会次第	136
視察研修	136
平成19年度全国市民憲章運動連絡協議会総会	137
市民憲章運動推進第42回全国大会参加状況	138
全国大会開催年次と開催都市	139

市民憲章運動推進第42回全国大会開催要領

1. 大会趣旨

倉敷市は、昭和41年「第1回市民憲章運動推進全国大会」開催地です。その後、平成8年に第31回を、そして今回、平成19年に第42回を担当することになりました。

第1回の昭和41年当時から言えば、時代は大きく変わりました。地球環境・国際情勢はもとより、国内でも政治、経済、社会、文化、どの分野を考えても、この40年間の変化は皆さん十分お気づきのことでしょう。

今回の大会では、危機的状況にある「地球環境」を中心に据え「環境問題」を、また全国的に都市や地域の活性化が求められていることから「まちづくり」を、そして平成の大合併にともなう市民憲章の消滅に起因する加盟都市の減少に対処し、新たな仲間を迎えるために「市民憲章運動」を取り上げて3つの分科会を設け、情報を交換し、進むべき道を論じ合うことにいたしました。

そうして、第1回開催地であるこの倉敷での大会を契機に、市民憲章運動が、再び大きな“うねり”となることを願ってやみません。

2. 大会テーマ いま、何が大切か！ ～人間にとって、都市にとって～

3. 大会会場 倉敷市芸文館・倉敷チボリ公園

4. 運営組織

- ◇ 主催団体 全国市民憲章運動連絡協議会、倉敷市民憲章推進協議会、倉敷市
- ◇ 共催団体 財団法人あしたの日本を創る協会
- ◇ 後援団体 内閣府、総務省、全国市長会、全国町村会、全国市議会議長会、全国町村議会議長会、全国自治会連合会、岡山県、岡山県市長会、岡山県町村会、岡山県市議会議長会、岡山県町村議会議長会、RSK山陽放送、OHK岡山放送、KSB瀬戸内海放送、TSCテレビせとうち、西日本放送、倉敷ケーブルテレビ、玉島テレビ放送、FMくらしき、朝日新聞岡山総局、岡山日日新聞社、産経新聞岡山総局、山陽新聞社、中国新聞備後本社、日本経済新聞社岡山支局、毎日新聞岡山支局、読売新聞大阪本社

5. 参加予定者

- ◇ 憲章運動を推進している民間団体及び自治体職員
- ◇ 憲章運動を推進しようとしている民間団体及び自治体職員
- ◇ まちづくりに関心のある住民

6. 日程

平成19年10月19日（金）

15:00～ 全国市民憲章運動連絡協議会第2回役員会（倉敷チボリ公園）

18:00～20:00 全国大会交流交歓会（同上）

平成19年10月20日（土）

9:30～ 全国市民憲章運動連絡協議会総会（倉敷市芸文館）

10:30～12:30 分科会【環境問題・まちづくり・市民憲章運動】（同上）

13:30～ 全国市民憲章運動推進第42回全国大会（同上）

16:30～19:30 視察研修「“日本の夕陽百選” 鷲羽山から見る瀬戸大橋」

（倉敷市児島）

平成19年10月21日（日）

9:00～ 自由見学 「倉敷屏風祭」（倉敷美観地区）



全国大会式次第

日時／10月20日（土）午後1時30分

場所／倉敷市芸文館

1. 開会

女声合唱組曲「倉敷の四季」		倉敷コール・クライネ
全国市民憲章運動連絡協議会唱和文唱和		
開会のことば	全国市民憲章運動連絡協議会副会長	小野山利雄
主催者あいさつ	全国市民憲章運動連絡協議会会長	室山 貴義
開催地市長歓迎のことば	倉敷市長	古市 健三
来賓祝辞	岡山県知事	石井 正弘
	倉敷市議会議長	秋山 正

2. 分科会報告

環境問題	福知山市市民憲章推進協議会副会長	谷垣 修身
まちづくり	計画哲学研究所所長	三輪 真之
市民憲章運動	財団法人あしたの日本を創る協会理事長	高岡 完治

3. 記念講演

「宇宙から見た地球環境」	NHK解説主幹	室山 哲也
--------------	---------	-------

4. 大会宣言発表

全国大会倉敷大会副実行委員長	土屋 紀子
----------------	-------

5. 次期開催地あいさつ

福知山市副市長	山段 誠
全国大会福知山大会実行委員長	前田 秀和

6. 閉会

お礼のことば	財団法人あしたの日本を創る協会理事長	高岡 完治
閉会のことば	全国市民憲章運動連絡協議会顧問	三田 望

開会のことば



全国市民憲章運動連絡協議会副会長

小野山 利雄

市民憲章運動推進第42回全国大会をここ倉敷市でお世話になることになりました。既に時代の変化、あるいは社会の動揺、さまざまな課題がある時代であります。午前中にはそれぞれのプログラムによりまして、非常に熱心に、この大会の趣旨に沿った会議・協議をしていただきまして、誠に御苦労さまでございました。

ただいまは大会ということで、再びここに立たせていただきました。申し上げるところはないのですが、今回、知事さまをはじめ御来賓をお迎えできまして、この会のために花を添えていただきましたことを衷心からありがたく、心より感謝を申し上げたいと思います。

市民憲章は、各地それぞれ若干のニュアンスが違いますものの、ただいま朗読がありましたとおり、おおかたの趣旨が市民のため、国民として、どのように私たちの役割を果たしていかなければならないかということを生生活の規範として定めたものでございます。この推進につきましては、各都道府県が相当、知事さんをはじめ御支援をいただいているところでございます。

ともあれ第42回がここまでまいりました。特に分科会で真剣な討議がございましたことは、非常に適切な内容でありまして、課題が大変に多い。そのなかで見直しを行う。あるいは今後のために市民憲章はいかがあるべきかと。このことを定めまして、展望を明らかにして、ますます発展をしてまいらねばならないと思うのでございます。

どうかひとつ、最後まで皆さまのあたたかい御支援・御理解・御指導をお願いいたしまして、開会のことばとさせていただきます。皆さん、御苦労さまでございます。

主催者あいさつ



全国市民憲章運動連絡協議会会長
室山 貴義

会長の室山でございます。倉敷市の市民憲章推進協議会の会長でもございます。今日は、「いま、なにが大切か！～人間にとって、都市にとって～」を大会のテーマに、御案内申し上げましたところ、北は北海道から南は沖縄まで、全国各地から大勢の方に御参集いただきまして、本当にうれしゅうございます。

市内からの参加が予想より少なく、多少さみしい思いをしておりますが、今日・明日は日がよすぎて、各地でいろいろなお祭りなどがあつたせいだと思っております。

倉敷市は40年前、旧倉敷・児島・玉島の3市が合併して新しい倉敷市になりました。そしてその5年後、昭和47年2月に新しい倉敷市の市民憲章ができました。ちょうど今、35年を迎えました。その市民憲章制定の際に、私は市の担当課長としてかかわっておりまして、その意味でも非常に感慨ひとしおのものがございます。

今日は、非常に変則で窮屈な日程になっております。朝から分科会など、どんどん進められておまして、半分すんだところで開会式というのもおかしなぐあいですけれども、前後左右の関係からこうならざるを得ませんでした。

そして最後に、遠方からお越しになったお客さんに、ぜひ美しい瀬戸内海の夕日を見ていただくという計画をいたしました。气象台に訊きましたら、本日の日没時間は17時20分ということで、そのためにも16時20分にはこの会を閉める必要がございます。そういうことで、日程的に時間ばかり気にするところが目立つと思います。記念講演の話も本当は1時間たっぷり取りたかったのですが、50分しか取らないというふうな非常に窮屈な日程となりました。

ともあれ、今日は知事代理、議長代理をお迎えして、そして会場には衆議院議員の橋本岳さんがお越しでございますし、県会議員の遠藤さんのお顔もちらっとお見掛けいたしました。そういう方々をこの会場にお迎えして、この会が持てますことを、本当にうれしく思っております。

この全国大会を機に、この倉敷の地に新しい芽生えがいくつも出てまいりますように。そして、この大会からお帰りになった全国各地の皆さん方の土地で、倉敷の風がしばらく吹きますように願ひまして、私の挨拶といたします。今日は、本当にありがとうございました。

開催地市長歓迎のことば



倉敷市長
古市 健三

本日ここに、市民憲章運動推進第42回全国大会が、全国から市民憲章運動の推進に御尽力されている多くの皆様をお迎えして、私ども倉敷市で開催されますことは誠に喜ばしく、倉敷市民を代表いたしまして心から歓迎を申し上げます。

倉敷市は、岡山県南西部の瀬戸内海に面したまちであり、観光・文化・産業を中心として発展を遂げ、現在は人口約47万人の中核市として、さらなる飛躍を目指しております。

とりわけ、今日の地方分権の時代にあつて、「ひと、輝くまち 倉敷。」をコンセプトに、「市民と創るこころ豊かな倉敷の未来」を基本理念として、市民の皆様の視点に立って、さまざまな施策に取り組んでいるところであります。

そのためにも、市民憲章の精神が、まちづくりにおける市民一人ひとりの取り組みのよりどころとして貴重な役割を果たせるよう、今後とも積極的な推進活動に取り組むことが重要であると考えております。

この倉敷大会では、「いま、なにが大切か！ ～人間にとって、都市にとって～」をテーマとして、「環境問題」「まちづくり」「市民憲章運動」の3部門の分科会や記念講演が行われることとなっております。本大会を通じて、全国各地における魅力あるまちづくりがさらに進展されますことを願っております。

また、本市には、伝統的な町並みをはじめ、瀬戸内の多島美や瀬戸大橋、さらには良寛和尚ゆかりの円通寺や倉敷チボリ公園など多彩な観光資源に恵まれております。この機会に、伝統と現代の両面の魅力を備えた倉敷のまちを堪能いただければ幸いです。

終わりに、本大会が、実り多いものとなり、全国の市民憲章運動がより一層推進されますよう祈念いたしまして、歓迎の挨拶といたします。

祝 辞



岡山県知事

石井 正弘

本日、全国各地から御来賓各位をはじめ、関係の皆様多数御出席の下に「市民憲章運動推進第42回全国大会倉敷大会」が開催されますことを、心からお喜び申し上げます。

また、これまで長年にわたり、この運動を支えてこられました全国市民憲章運動連絡協議会並びに関係各位の御尽力に対し、深く敬意を表します。

今回の分科会は「環境問題」「まちづくり」「市民憲章運動」と伺っておりますが、第1回目の大会がこの倉敷で開催された昭和41年頃といえば、いざなぎ景気といわれる経済成長の影で、水俣病や四日市ぜんそくなどの公害病が社会問題とされた時期です。あれから約40年、日本の公害問題は行政の規制と企業の努力により改善されましたが、代わりに、地球規模での環境問題が待ったなしの状況となっています。

環境問題につきましては、個人の日々の生活の中で循環型社会形成に向けた取り組みをいただく必要があり、「市民ひとりひとりの実践すべき目標」である市民憲章運動の一環として推進されるにふさわしいテーマであると存じます。

また、「まちづくり」と「市民憲章運動」につきましては、平成の大合併により従来の自治体の枠組みが大きく変わり、岡山県でも当地倉敷市など8市が広域化され、5市が新設されました。申し上げるまでもなく民主主義の基盤をなすものは地方自治であり、地方自治を支えるものは地域住民の連帯感です。激動のこの時代にこそ市民憲章を広く普及し、その一言一句ににじみ出る愛郷心・公德心により、市民の「まち」に対する愛情を醸成し、「まちづくり」への参加意欲を喚起し、地方自治・住民自治の礎となることを期待します。

なお、御来県いただいた皆様には、風光明媚な瀬戸内海国立公園や歴史と文化あふれる倉敷美観地区、少し足を伸ばして吉備路など、岡山の魅力もぜひ味わっていただければと存じます。

終わりに、本大会の御成功と、御出席の皆様のみまますの御健勝を祈念いたしまして、お祝いのごとばといたします。

祝 辞



倉敷市議会議長

秋山 正

本日ここに、市民憲章運動推進第42回全国大会が、全国各地から多数の皆様をお招きし、盛大に開催されますことは誠に喜ばしく、倉敷市議会を代表いたしまして、一言御挨拶を申し上げます。

はじめに、本大会の準備・運営にあられました関係者の皆様に対し、深甚なる敬意を表し、衷心より深く感謝申し上げる次第でございます。

さて、本市は、瀬戸内のおだやかな風土と高梁川がもたらした豊かな台地に恵まれ、昭和42年の発足以来40年間にわたり、伝統と文化を受け継ぎながら、瀬戸内の中核都市として発展を続けてまいりました。また、平成の大合併といわれる中、平成17年に周辺の2町と合併し、真に豊かな市民生活を地域が一体となって目指しているところでございます。

現在、本格的な分権時代にあって、それぞれの自治体は、自らの判断と責任において個性豊かで効率的なまちづくりを進めていくことが強く求められています。

また、国際化、高度情報化や少子高齢社会の急速な進行などにより、私たちを取り巻く社会情勢は、非常に大きな変化を見せております。加えて、資源の枯渇や地球温暖化、環境汚染といった地球全体の環境問題の解決も大きな課題となっております。

多様化、複雑化する現代社会において、市民参加によるまちづくりの意識が急速に高まる中で、従来の都市計画やまちづくりの手法は大きな見直しを迫られるようになっており、新たなまちづくりのあり方を考えるうえで、市民と行政が共に支持することのできる市民憲章の果たす役割は、極めて重要であると言えます。

どうか、皆様におかれましては、今大会を契機に、さらに交流を深めていただき、市民憲章運動が、大きな広がりを見せますよう、なお一層の御尽力を賜りたいと存じます。

最後になりましたが、本大会が成功のうちに終了し、皆様にとりまして実り多き大会となりますことと、本日御出席の皆様方の、今後ますますの御健勝と御活躍をお祈りいたしまして、挨拶とさせていただきます。

分科会報告（環境問題）



福知山市市民憲章推進協議会副会長

谷垣 修身

午後の非常に眠い時間ですけれども、環境問題といいますと、家の水がおいしいとか、空気がきれいとか、大変生活に直結した問題を話し合いました。

今年のノーベル平和賞は、ゴア前副大統領（米国）が受賞されました。これは環境問題の『不都合な真実』という映画のキャンペーンで、今、地球が本当に危ない、みんな意識を持とうではないかということ訴え続けて、ノーベル平和賞を受賞されたわけです。

環境問題と申しますと、国家レベルで取り組むべきこと。それを受けて企業が、法律に基づいて、あるいは企業理念として、環境問題を実現していくこと。もう1点は、市民レベルで、われわれが非常に身近なところのできる問題。この2点に大きく分かれると思います。

今回は、企業で見た環境問題と、市民レベルで見た環境問題という2例を発表していただきました。まず1例の企業部門につきましては、JFEスチール株式会社の滝平さんが、水島コンビナートにある自分の会社に取り組んでいる事例を発表いただきました。その会社は、コンビナートの面積の約半分を占めているということで、社員数が3,100名とおっしゃっていましたが、その企業の理念として環境問題を正面から取り組んでいるということです。

第1点目は、「CO₂の削減」。これは先ほどゴア前副大統領の提言しておりましたことと同じことですが、企業においても取り組んでいるということです。

第2点目は、「大気、水質、廃棄物にかかわる取り組み」ということで、それぞれの例に基づいて発表いただきました。実は、今までの私たちの消費エネルギーは、産業部門が非常に大きなウエートを占めておりましたが、近年では私たちの生活のなかで消費するエネルギーのほうが増えています。それは産業部門においてもそれぞれの削減努力をされて、それを抑えていこうという姿勢がだんだん高まっているということでございます。

詳しいことにつきましては、はしょって説明させていただきますけれども、そのためには企業の姿勢が大事だというのが根本的にあると思います。企業もやはり市民の一部であるということで、ともに取り組んでいることを強調されておりました。

もうひとつかたにつきましては、「鷲羽山の景観を考える会」事務局長の岩中さんです。鷲羽山の景観に、昔の緑を取り戻そうではないかという運動です。戦後の食糧難のあたりから、山に畑をつくったり、燃料

のために木を切りすぎたりしたために、はげ山になってしまった、それではいけないということで、昔に基づいて緑を植えたいという運動を進めていこうということです。

そして行政も引き込んで、木を植えました。ところが運動が盛り上がり木を植えて、植えばなしにするのですぐに枯れてしまうということがありました。各地域でもいろいろ取り組むのですが、あとのフォローがなかなかできないということで、この会の皆さんは、そのあとのフォローアップをなんとかしていこうではないかという取り組みをされております。

そして鷺羽山に行きますと、ゴミが非常に散乱しているので行政側に相談しますと看板を立ててくれました。しかしそれだけでは、根本的な問題解決はできません。行政の方も一緒に現場に行き、一緒にゴミを拾おうではないか、共に働く「共働」、これをしないと絶対駄目だと、特にそういう運動を進めるために、地元の方に呼びかけをして、地元からエネルギーをつくって広げていくことが大事だとおっしゃっていました。

それからそういう運動を市民レベルで進めていくためには、まず楽しみながら活動できる環境づくり、言われてしかたなく行くのではなく、楽しいから一緒に参加するのだということで、まさに「鷺羽山の景観を考える会」では、ハイキングをすとか、弁当を持って楽しみながらやっているということでございます。

次に大事なことは、そういう運動を次の世代につなげていくということです。子どもたちも一緒に活動して、息の長い活動をする必要があるということです。

そして市民の皆さんとも意見交換をしまして、参加されている方も、鷺羽山の景観の取り組みはすてきだなと、今後私たちがそういう「共働」、人を巻き込んで運動することが必要だということに共感を覚えられたようです。

そのあと岡山大学資源生物科学研究所所長の武田先生に総括をお願いしましたところ、今後、一番着目される環境問題というのは、「水」だと言われました。「水」というのは、生活のなかで非常に大事です。1トンの鉄をつくるのに120から130トンの水が必要だそうです。ところが穀物1トンをつくるには、水がどのくらい必要だと思いますか。1千トンから2千トン必要だそうです。ということで、「水」というものをもっと真剣に考えなければならないということをお話者の先生からいただきました。

それから環境問題ですが、今後100年後、200年後をどうするかという気の長い話も大事なのですが、今われわれが取り組む環境の問題で一番大事なことは、孫の世代が安心して暮らせるようにしていきたいということです。そうすると皆さん非常に身近な人たちで、ターゲットが絞やすいと思います。

まず、われわれが目の前からできることをしていこうというのがキーポイントになりました。そのなかでもう一度思い出していただきたいと思う言葉は、アフリカのワンガリ・マータイさんが言われた「もったいない」という言葉です。これはもう市民権を得ている言葉だと思いますけれども、やはり「もったいない」という精神は、今後持ち続けなければならない。無駄を省く、もったいない。そして孫の世代まで、この美しい景観を残すためには、自分で何ができるだろうかと考える。それが一番大事だということで、環境問題分科会を閉じることができました。以上です。ありがとうございました。

分科会報告（まちづくり）



計画哲学研究所所長

三輪 真之

それでは引き続き、第2分科会「まちづくり」について、御報告させていただきます。なお、私は市民憲章情報サイトというものを運営しております、今日御来場の方々にも随分御協力いただいておりますので、私事ではありますけれども、この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございます。

それでは、分科会の報告は座ったままで失礼させていただきます。

まちづくりの分科会は、御存じの方も非常に多いかと思っておりますけれども、今日と明日、倉敷のメインイベントに数えられております、いわゆる「倉敷屏風祭」が真ただ中です。その実行委員長をされております岡庄一郎さんから、屏風祭の由来、もともとは200年前、阿智神社の祭事として、まちの方々が当時お祭りとして、それぞれのお家で宝物のように大切に残されているものを、御近所の方々やお知り合いの方々にお披露目になって、一緒に楽しく過ごされたということがありました。

ところが、それが明治期にどういうわけか廃ってしまった。それをいろいろな意味で、倉敷を再生・活性化するために、もう一度掘り起こしてみんなでやったらどうかというようなスタートから、非常に丁寧にお話しいただきまして、スライドでまさに今、進行中の状況なども御説明になって、私も含めて、御出席の方々、楽しく、また素晴らしいことだなというぐあいには拝聴いたしました。

もうひとかたは、「倉敷町家トラスト」代表理事の中村泰典さんから、実例として御発表いただきました。単に狭い意味の「再生」というところにとどまらず、多くの方がそれを手掛かりにして、いろいろなことが見えてくる。あるいは、いろいろな気持ちの持ち方が変わってくる。あくまでひとつのゴールではなくて、そこからいろいろなことが出発するのではないかというようなスタンスで、これまでの活動、あるいは現状等を丁寧に御説明いただきました。

そのあと、司会を務められました室山会長は、まちづくりと市民憲章ということ「誰が（主体）、何のために（目的）、何を具体的にやるのか」というような論点・視点を少しはっきりさせて、各地からおいになった方々の御報告も含めて、いわゆる会議ではなく、討議といえますか、何かためになるものを得て帰る会にしたいという趣旨で、いろいろな方々からの御発言を賜りました。

そのときに、私の感想も含めて申しますと、現在市民憲章推進運動というのは、まちづくり・コミュニティ・地域福祉等にかかわるNPO活動、それと地域政策・コミュニティ政策にかかわる協働のまちづく

りというような言われ方をしている、行政主導ではないですが行政が推進をかなり強く意識しているまちづくりの施策と、かなりオーバーラップしている部分がありまして、これは単に倉敷等に限らず、今私の得ている情報でも各地の自治体で、かなり重い問題として受け取られています。今後の市民憲章推進活動、あるいは運動がどのように展開していくのかという、かなり最先端に近いひとつの問題を提起する場になったかと思えます。

いろいろな都市、福山・高知・宇都宮・花巻・石垣等々の、かなり遠方からも御来場者がありました。具体的には、倉敷市内参加者・市外参加者が、測ったように半数の御出席ということでちょっと驚きましたけれども、遠方から来られた方々が、かなり有用な事例等に絡めて、今の問題について御発言いただきました。

私がお聞きしていたところでは、今日御来場の方々も各地にお帰りになって、あらためてお考えいただけるありがたいと思うことですが、いくつか問題提起がされております。例えばひとつは、これまでまちなみとか、まちの再生という問題は、多く話題になっているのですが、個人が大切にしている文化的な文物、これは従来博物館に寄贈すればいいのではないかと、公的なところが収蔵して管理すればいいのではないかなど、考えてみればかなり安易な格好で進んできたかと思うのですが、そういう大切なものを個人が、あるいは地域の人たちが力を合わせて守っていかないといけない時代が来るのではないかと。福山の方や花巻の方は、例えばひな人形などはどういふぐあいに保存していくのかとか、あるいは自分の家だけではなくて、多くの人とそれを介して楽しんでいくような方法はないものだろうかというようなお話がありました。

そのほか、これは法律の問題ともかかわりますが、町家に限らず相続の問題も実はまちづくりや市民憲章推進活動と関連を持つのではないかとというような問題提起もありました。

それからさらに、先ほども少し申しましたがNPOとの連携、特に市民憲章推進活動もNPOも、正直なところあまり運営費が潤沢とは言えないと思います。そういったところをお互いにカバーし合う、助け合う格好で、これから手を取り合っていく新しい時代が始まるのではないかと、そのような感じもいたしました。

ただ総括として申しますと、変な言い方ですが、ものが見え始めますといろいろなことが見え始めると思います。特に今日の屏風祭や町家トラストの御発表も、これまで光が当たらなかった、あるいはなかなか見えなかったことにスポットを当てて、具体的に活動が結び付く。そういった事例がありますと、いろいろなことが見えてきます。私は本来、それが市民憲章運動の原点だと思っています。市民憲章というものを意識することによって、まちづくりのいろいろなことが見えてくる。そして自分が楽しく、何ができるだろうかというような発想でものが見られるようになる。そういう意味で、今日の分科会は、非常に意義のあるものだったと思っています。ありがとうございました。

分科会報告（市民憲章運動）



財団法人あしたの日本を創る協会理事長

高岡 完治

高岡でございます。市民憲章の分科会では、石川県七尾市と岩手県奥州市、それから司会を務めてくださいました岩手県花巻市、この三つの事例を最初に紹介していただき、それをもとに会場の皆さま方とフリートーキングをさせていただくというかたちを取りました。

この3市に共通することは、いずれも1市3町、あるいは2市2町1村の平成の大合併後に新しい市民憲章をおつくりになったところでございます。その合併に際して、しこりがあったところと、大きなしこりもないままに合併に至った、その合併の経緯が、やはり市民憲章づくりに、非常に大きな影響を与えているということを実感いたしました。

この3市ともお考えになっていることは、従来の市民憲章の在り方、ともすれば一部の方の運動にとどまってしまった結果として、そういうことを乗り切るためには、いったいどういうふうにしていったらいいだろうか。市民憲章を市民の皆さま方に根付かせるためにはどうすればいいかという、これを一番の問題意識として、新しい市民憲章づくりに取り組まれているということでございます。

ただ、最初の事例の七尾市につきましては、本当に市民憲章づくり、つくる仕組みづくりのところから、実はいろいろな工夫をこなされてやってこられた。その工夫とは、いかに市民の人たち、いろいろなタイプ・分野の市民の方たちの御協力・意見を吸収するというかたちで市民憲章をつくったということで、小学生グループ・中学生グループ・10代・20代から最後は70代・80代というたくさんのグループに分けて、グループごとに市民憲章案をつくって、それを全体討議にかけて、最終的には市議会で議決をされたというつくり方をしておられました。

その問題意識は同じなのですが、奥州市さんのほうはやや違ったつくり方、どちらかといえば行政を中心としたつくり方をなさっておられるのではないかと思います。問題意識は同じながらも、やはりまちの特色を生かしながら、より良い根付いたものをつくったという問題意識でされていると思います。一番うまくいかれたのが、花巻市であったということでございます。

やり方としては、市民憲章をつくるにあたってのシステムづくり、それからそのシステムの運営をどういうふうにしていくか。制定後も、やはりこの推進する組織のつくり方、どういう組織をつくるか。つくった組織をどういうふう運営していくかと、この大きな二つの問題点でやっておられるのではないかと

思いました。

会場で一番問題になりましたのは、まちづくり基本条例と市民憲章との関係をどう考えたという問題点が奥州市さんのほうから提起されました。今奥州市さんは、目下まちづくり基本条例をつくられている最中でございます。市民憲章も条例も非常に難しい。市民憲章を基本条例に盛り込んでもらえばいいと思うのですが、なかなか賛成する人がいないというような悩みも抱えておられます。それで今、非常に問題になったわけでございますけれども、これから行政と市民との協働ということを考えますと、やはり行政がいかにか市民の皆さま方の力を引き出し、それを生かしていくかという観点から、この両者の関係というものも考えていくべきではないかということ、私のほうから申し上げさせていただきました。

具体的なやり方は、それぞれまちの特色というものがありますので、どれが正解だということはないと思います。その正解をそれぞれのまちで見つけていく努力をするということではないかと思ひますし、往々にしてまちづくり基本条例は市民憲章とは関係ないという言い方が一般的にもあるのですが、しかし市民憲章に結集された市民の皆さま方の力・理解といったものをまちづくりのうえで生かしていくということは非常に大事なことでないかと私自身は考えております。

この市民の力を引き出すということが、今行政と市民とのコラボレーションということでは言われているわけですが、これから地方分権の時代になりまして、ますます今一番眠っている市民の力をどう引き出していくかということに、行政や議会の皆さま、やはり市民の皆さんが一生懸命になって考えていくということが非常に大事だと思います。そのひとつのツールとして、市民憲章・まちづくり基本条例というものを考えていくべきではないかと考えております。

私は、「未来は変えられる」ということが市民憲章のコンセプトではないかと思ひます。いろいろな社会学者・経済学者の予測は、往々にして非常に暗いイメージで、いろいろと声高に語られておりますけれども、それは過去を引き延ばして将来を予測するからそういうことになるわけです。

しかし、私たちの意識や、私たちの行動によって、未来は変えられるのです。変えられないものであるならば、私たちの意識・努力というもの、全く評価されないということになります。しかし歴史は、その逆のことを私たちにはっきりと示してくれているわけですから、その変えるひとつの手段として市民憲章というものを考えていくと、まさしくこれから市民憲章の出番が出てきたというふうに申し上げていいのではないかと思っております。感想も交えまして、お話申し上げました。

大会オープニング

女声合唱組曲「倉敷の四季」

倉敷コール・クライネ

倉敷コール・クライネは、1980年、指揮者田中浩氏を中心に12名の有志が集い誕生しました。以来、毎年の定期演奏会を行いながら、ミサ曲・ジャズなど、さまざまなジャンルの合唱曲を歌っています。音楽を楽しむことを目的として、近隣の合唱団との交流、2006年10月には東京藝術大学での演奏会にも参加しています。また、海外への演奏旅行も多く、中国、アメリカ、ニュージーランドをはじめ、今年8月には、倉敷市の姉妹都市サンクトペルテン市（オーストリア）との姉妹都市提携50周年を記念して、サンクトペルテン市で現地の合唱団と共演をするなど意欲的に活動しています。



倉敷の四季

作詞 室山 多香史 作曲 熊澤 住子

第1章

かすかに かすかに 音がきこえます
水面を叩く 音がきこえます
芽ぶいたばかりの柳
近づいてくる白鳥
小さいのち いとしむように
静かに静かに 雨が降ってます

お元気ですか あなた
とおく離れた あなたを
いとしいと思うようになってから
この町に はじめての春がきました

倉敷は白壁の町
あなたが あのとき
「君のようだね」と言ってくれた町
その倉敷にいま 雨が降ってます

第2章

ミン ミン ミン ミン ミン ミン ミン
シャー シャー シャー シャー
シャー シャー シャー

柳のみどりの間から
蝉たちだけの大合唱
ざらざら 光る太陽
中橋わたる とりどりの陽傘
あゝ これが 倉敷の夏!

アイスクリーム ほおぼりながら行く
パンツ姿の カップル
リュック背負って ひげ面の汗をふく
外国の若者
ミン ミン ミン ミン ミン ミン ミン
シャー シャー シャー シャー
シャー シャー シャー

柳のみどりの間から
蝉たちだけの大合唱

第3章

おぼえてる!? 坊や
おみこしの賑わい 素隠居のうちわ
おぼえてる!? 坊や
千歳楽のかけ声 太鼓のひびき

あれは そこ 鶴形山の阿知神社
秋のお祭りだったのよ
ママもね 坊やが元気で大きくなるように
一生けんめい お祈りしたわ

でも今は静かでしょう!?
白壁を月が照らして
足もとの萩の露が光って
そこここで 虫が鳴いてて まるで夢のよう

聞いてね!? 坊や
ママがはじめて あなたのパパと
デートしたのも こんな夜だったのよ
聞いてね!? 坊や
あら!? 泣いちゃうの? いやーね!!

第4章

ロダンの像に 粉雪が散って
小さな生垣に 寒椿が咲いて
美術館はいま ひっそりとたたずむ
ヒュル ヒュル ヒュル
ヒュル ヒュル ヒュル ヒュル
暮れてゆく西空を ちらと見やって
コートの手を立てる
かげのある あの人の
あゝ これが倉敷の冬!!
宿から洩れる灯りに
人恋しさのつづる タぐれ

倉敷は 白壁の町
ユトリロの画のような
淋しさの似合う町
粉雪が散って 寒椿が咲いて
ヒュル ヒュル ヒュル ヒュル
ヒュル ヒュル ……

倉敷はいま
倉敷はいま 冬を歌っている

記念講演 「宇宙から見た地球環境」

NHK解説主幹 室山 哲也氏

今、400キロ以上の宇宙の高みから、地球環境を一挙に観測できる人工衛星が、いくつも上がっています。その人工衛星から見た地球は、想像以上に傷つき、病んでいることがわかってきました。現代科学の目が捉えた地球は、巨大な一つの生物のように、体を揺るがせ、苦しんでいるようにも見えます。

20世紀の人類の最大の過ちは、「地球が無敵だ」と勘違いしたことでした。しかし現実には地球は有限でした。21世紀になって、私たちがわずかな変異に気がついたときには、すでに地球温暖化という深刻な現象が深く進行していたのです。

これから、私たちはどうしていけばいいのでしょうか。

一つだけいえることがあります。それは、今日の環境問題が私たち人類によって引き起こされたのなら、私たち人類の英知で、それを克服できるはずだということです。

地球は今どうなっているのか。私たち人類は、今後どのような都市、国、文明をつくっていけばいいのか。衛星が捉えた最新の映像をふんだんにお見せしながら、地球環境の今と、今後のあるべき姿をぜひ一緒に考えてみたいと思います。

室山哲也氏プロフィール

昭和28年、岡山県倉敷市生まれ。AB型。

昭和51年NHK入局。「ウルトラアイ」「クローズアップ」などの科学番組ディレクターの後、チーフプロデューサーとして「NHKスペシャル」や「クローズアップ現代」を担当。特に脳科学（「多重人格」他）、科学技術（「チェルノブイリ原発事故」「原爆」他）、環境問題（「北極圏」他）、災害（「阪神大震災」他）を重点テーマに制作。

NHKエンタープライズ21時代は、イベント（アイデア対決ロボットコンテスト他）や大型映像、博物館をプロデュース。衛星ハイビジョン局でカルチャー番組全体統括チーフプロデューサーをつとめる。現在解説主幹。また、科学全般のニュース解説と子供向き科学番組キャスター（毎週土曜日「科学大好き土よう塾」）、日本科学技術ジャーナリスト会議理事など、活躍は多岐にわたる。

NHKスペシャル「にがよもぎ・チェルノブイリ原発事故」（1987）でモンテカルロ国際映像祭ゴールデンニフ賞受賞など数々の受賞歴がある。



「宇宙から見た地球環境」

NHK解説主幹 室山哲也氏

青く美しい地球。その地球に今何が起きているのか、
そしてこれから地球はどうなっていくのか。

衛星が捉えた最新映像を使い、「今、そこにある地球の
問題」について、わかりやすく解説されました。



奇跡の星—地球—



室山でございます。50分しゃべれということでやってまいりました。今日は、宇宙から見た地球環境についてしゃべりなさいということで、かしこまりました。おやじが言うものですから、命令は絶対でございますので、その話をさせていただきます。

私たちは環境のことを考えるときに、「虫の目」と「鳥の目」ということをよく言うのですが、両方ないといけません。「虫の目」は、私たちが地べたで生きている生き物の目ですけれども、「鳥の目」は、離れたところから、高めから見ると鳥の目ですね。私たちがふるさとを離れて遠くに行ったときに、はじめてふるさとのことがわかるように、遠くからものを見ると、別のものが見えてくるということで、今日は人工衛星が見た地球の姿をいろいろお見せしたいと思っておりますので、だからどうだというのではなく、ちょっと情報提供ということで、それをいろいろな手掛かりに考えていただければありがたいと思います。

さて、私の前にあるこれは、直径が1メートルの地球です。ここからここまでが1メートルです。月は、だいたいバレーボールぐらいの大きさです。場所はあのへんです。後ろを見てください、あそこに月があります。予算上のことで、オレンジ色しかなかったのですが、月はあの位置で、月が地球の周りを回転してい

るわけですね。こうやってみると、宇宙のすごさがわかります。

さて、地球から、今年ある探査機が出発します。日本の探査機です。今、月に向かっています。この道行きの3分の1のところから、地球を振り向いて、先だって9月30日に地球の映像をNHKのハイビジョンカメラで撮りました。それをちょっと、見ていただきましょう。

<スライド>

これが11万キロから見たハイビジョンのVTRで撮った地球です。右下が南米で、上が北米ですね。地球もやはり球体ですから、太陽光線でこういうふうになり半円みたいになります。これをハイビジョンで見ますと、もう、息をのむような美しさですが、周りにはもう真っ暗です。何にもありません。どうしてこんなところに、こんな大きなものが浮いているのかということも不思議ですけれども、これが私たちの地球です。この上に、私たちのすべてが生きているということです。逃げ場はありません。ここで生きていくしかない。外に行こうとしても、地球には人類をみんな宇宙に飛び出させるエネルギーはありません。私たちはここで生きていくしかないということです。

<スライド>

さて、月の位置がわかったあと、これを出してくだ

さい。これを撮ったのは、日本の探査機の「かぐや」です。今、月の周回軌道に入っていて、月の成り立ちや太陽系の進化をこれから1年間調べます。こういうふうに宇宙の目を持つと、地球がとてよく見えてくるということです。地球はどんな星なのか、生き物がある星ですけども、地球はどういう星かということがいろいろわかってきます。

これは一番左が太陽ですね。水金地火木土天海冥、冥王星はこのあいだ惑星から外れましたが、この三つ目、これが地球ですね。実は、宇宙には水はありふれている物質だそうです。どこにでも水はある。だけど、地球よりも内側だったら蒸発してなくなってしまったり、地球より外側だったら凍結して氷になってしまいます。そこが、生命が生まれるうえでの分岐点です。地球の水は流れる水です。この「流れる」ということがとても大切なのです。だけど実は、これだけで生命が生まれるわけではないのです。もうひとつ必要です。地球の場合は「月」でした。

<スライド>

ご覧いただいたように、これはアポロが撮ったものですけども、これが月ですね。地球があります。さっきあんなに遠かったのですが、その地球に対して、月が引力・重力を持っていますので、影響を与えています。月の魔力ともいわれる力です。その事例をちょっと見てもらいましょう。

<VTR>

これは、「ポロロッカ」というアマゾン川のある支流で大潮の日に起きる大逆流です。5メートルの波が時速65キロで、800キロ上流まで行きます。これは月の力、要するに潮の満ち引きで起きている現象です。これはもう大変な状況です。最近サーファーが、都合がいいということでここに行って、上流に行くとピラニアがいてやばいことになったという話もありますが、いずれにしても大変なものです。

<スライド>

ご覧いただいてわかりますように、水の循環というものがあります。この水は、循環する。今のように、潮を満ち引きで、地球の上の水をぐるぐる混ぜるので

す。雨になって、大地に落ちる、川から流れてくる。水がぐるぐる回ることが、生命が生まれることにとっても重要なことなのです。

水が引いたり減ったりする、そういう際のところで最初の細胞が生まれたのではないかという説もあります。そこで、私たちの最初は生き物ができて、進化が始まって、魚だった私たちは陸上に上がります。そこから上がってくるということですね。ですから、そういう意味で言うと、私たち生命というのは、地球と月のコラボレーションでできているということになります。

月がなければ、私たちはここにいません。もちろん水がなくてもいい。奇跡的なことです。だから月がなければ、もうわれわれはオオカミ男伝説の話もしないし、月をめぐる演歌をカラオケで歌うこともない。誰もいない。そういう奇跡のうえで成り立っているのが、私たちの星だということです。

<スライド>

地球は有限の星だった



「生態系」という言葉があります。これは本物なのですが、ここに魚がいますね。海草があります。上に空気がある。水がある。もうこれはガラスで閉ざされているので、この中で循環・関係が完結しています。魚が出したふんを使って、これが育ちます。上の酸素を使って、これが育ちます。これが二酸化炭素を吸収する。酸素を出して魚が生きると。この中で、ぐるぐる物資が回っていることを循環といいますけれども、こういう循環のシステムを地球はもともと持っている、地球だけで生きていた力を持っていたのですが、こういうことが始まりました。

<スライド>

人間という生き物がこういうことを始めたということですね。地球環境汚染は、人間の環境破壊で始まったということです。さっきの循環システムがこうやって崩れ始めた。20世紀の私たち人類の最大の過ちは、地球が無限だと思い込んだことです。だけど地球は有限だったということを、今、私たちは目の当たりにしているという状況だと思います。

さて、それではちょっとクイズをやりたいと思えますけれども、地球の1メートル直径ですが、地球のこの表面に水があります。どのくらいの水があるかといいますと、海の厚さは0.3ミリくらいです。全部の海水を集めると、だいたいビール瓶1本です。だけど塩水なので使えません。使える真水は、17ccです。だけど17ccの真水も使えません。12ccは南極と北極で氷になっています。

そうすると、流れていて、真水で、私たちが飲んだり、農業に使えたりする水の量は、最終的にはスプーン半分くらいです。このスプーン半分くらいの水が、この地球上の川や湖などの私たちが使える水としてばらまかされているわけですね。その水をめぐって、南北問題や水問題が起きています。だからもう資源はないわけですね。これからたぶん、これをめぐっての戦争も起きるかもしれませんが、水問題というのは、本質的にはそういうことです。この水を汚して、いろいろな疫病がはやったり、取り合いが始まっているということですね。

それではもうひとつ、この地球の空気の量はどのくらいでしょうか。だいたい1ミリくらいです。1ミリといたら、ここの際ですね。そこをジェット機も飛んでいます。スペースシャトルは2センチくらいのところを、ぐるぐる回っている。こういう状況です。空気は、薄皮饅頭のように地球の上を囲っている。その下に、私たちはへばりつくように暮らしている。汚れないわけではないですね。この地球が1メートルだったら、空気はそれだけです。

<スライド>

この映像を見てください。これは実際に、400キロくらいから撮った映像ですけれども、大気層はここに見えます。薄いベールのような、これが大気です。この層の下に、少なくとも144万種の生き物が生きていて、そのうちの1種の人間が活動して、今の環境問題が起きている。見ると、もう本当に汚れないわけではないということがよくわかる写真だと思います。「人口爆発」、日本は少子高齢化ですけれども、先進国と裏腹に地球全体はこの勢いです。人間が始まったところはこ

のくらいでしたが、産業革命のころから、もう上に一直線ですね。もう爆発ですね。そういう状況です。その人間がすべて活動するわけです。

気温の上昇はといいますと、この2100年に向かって、これからこの範囲のなかで収まるだろうと言われていきます。今まではずっと横だったのですが、ここから急速に立ち上がると。ノーベル平和賞を受賞されたゴア前副大統領（米国）はこのことを訴えたわけですが、この様子を見ますと、地球の温暖化というものがただ事ではないということがわかります。人口爆発は、1秒2.4人、1日20万人。二日間で倉敷市民が生まれているというような状況になっているということです。

<スライド>

地球観測衛星から見える地球の異変



さて、その状況を地球観測衛星で見ましょう。人間の目でわからないものを見ましょうということで、前のデータなので古いことも書いていますが30くらいの地球観測衛星が乗っていて、センサーを使って、陸・海・大気を見ています。

<スライド>

夜の地球です。2002年8月10日・11日の夜の地球です。赤いところは、人間活動の光です。アメリカなどの赤いところは光ですね。一番明るいのは北米です。このあたりは真っ赤かですね。最近ではアジアがすごいです。欧州からずっとインドがすごい。中国がすごい。日本あたりがすごい。こういう状況になっています。日本周辺はこうなっています。倉敷はこのあたりですかね。ここは韓国です。この北が北朝鮮です。ほとんどエネルギーが使われていないことが宇宙から見てもわかります。

こういう状況のなかで、日本も「だいち」という地球観測衛星を上げて、主に陸を調べています。

これからちょっと、宇宙から見たいろいろな写真をお見せしますけれども、今年の最大の話題というのは北極でした。北極で、大きな異変が起きました。

<スライド>

わかるでしょうか。これは宇宙から見たもので、こちらが 10 年前の北極上空の氷ですね。10 年前の 9 月 17 日と、今年の 9 月 17 日の氷です。下におりましょう。こういう状態が、右のようなまばらな状態になっています。今年は、観測史上、氷が最小になりました。

今年の 5 月ごろからどのように減ったかのこま撮りがありますので見てみましょう。

<スライド>

今年の 5 月から現在までです。氷は、夏と冬を通じて増えたり減ったりします。これは、ずっと減っているところです。これが 6 月、7 月、8 月ということですね。こういうふうな状況で、今年はどんどん減ってきています。

さあ、今、北極でそういう氷の減少というものが起きていて、これがどうして悪いのかというと、北極の氷がなくなると、地球を上からふたをしているわけですから、今までは太陽光線を跳ね返して、温度を下げる働きだったのが、ふたが取れるわけですから、上からのエネルギーを吸収して、海が熱くなる。そうすると、跳ね返す海から、吸収する海になって、地球全体の温暖化に大きな影響があると、科学者たちは言っています。

北極以外の異変も見てみましょう。

<スライド>

北の大地ですね。地べたを見てみましょう。アイスランドの氷河です。「だいち」から撮られている、このあたりが氷河です。非常に美しい、覆うような氷がこっちに向かって流れている様子がわかります。エベレストのでは、こういう高速道路みたいに見えるのは、これが氷河です。この氷河の溶けた水がたまって湖になるのを氷河湖といいますが、この氷河湖の大きさを見れば、どのくらい溶けているのかわかるということです。

1992 年から 2007 年を調べますと、この氷河湖の大きさが非常に大きくなっているのがわかります。やはり全体的に氷が衰退していて、これが大きくなっている。エベレストの状況もそういうことがわかります。

<スライド>

さあ下におりてみましょう。シベリアに行きます。永久凍土地帯は、ぐずぐずになっています。こういうふうな電柱が倒れていたり、水浸しになってしまったり、道路が陥没して溶けてしまっています。地割れをしています。こういうところは、最初の氷が溶けて、水が流れた跡だと思われれます。こういうふうな状況が、まずひとつあると。人間活動は、いろいろ進んでおります。

<スライド>



NHK解説主幹 室山 哲也氏

これは、サウジアラビアの円形農場というものです。円いのが全部農場で、小麦をつくっている場所です。どうして円いのかというと、スプリンクラーで地下水をまいているのですが、スプリンクラーの半径が 350 メートルなので、そのぶんぐると円い農地ができるのです。サッカー場の 54 倍の広さです。こういうふうにして、農場が次々と砂漠地帯にできています。

1 万年以上前の地下水をくみ上げているのですが、このまま行きますと 2040 年に枯渇してしまうという状況です。

<スライド>

これは中国のタリム（塔里木）河を衛星から見たものですが、砂漠化が起きています。タクラマカン砂漠、1973 年、このへんに湖や川がありますが、これがこっちではもう消えてしまっています。消えてしまって、このへんが真っ白になっているのは、地面の塩が噴き出して塩害ですね。こうなると、もう農業ができません。この砂漠化の現象は、1 年にだいたい四国と九州

を合わせたぐらいの範囲が毎年地球から砂漠になっているわけです。人間活動の結果です。農業そのものも影響を与えています。

<スライド>

1996年のアラル海です。アラル海というのは、琵琶湖の100倍ぐらいある大きな湖ですが、これが2003年はこういうふうにも縮小しています。この白いところは、塩が噴き出しているところです。並べてみると、1996年から縮小しています。塩が噴き出して、このへんも灌漑の影響でこうなっています。旧ソ連が綿花栽培を大規模にやって、灌漑を行って、水を使ったために、こういうふうな砂漠化が起きています。

<スライド>

同じような現象が、中国でも起きています。これは中国で2番目に長い川の黄河です。上流から下流に向かっていく黄河を見ると、水が全くありません。これは「断流(だんりゅう)」という現象で、上流で大規模な農業をしたり、砂漠化現象・乾燥化が起きたりした結果、黄河の水がなくなってしまったということです。こういう現象も起きています。

<スライド>

アマゾンの森林伐採ですね。道路にくしのように見えるところがありますが、これは人間が伐採した跡です。違法伐採も非常に進んでいます。森は、二酸化炭素を吸収してくれますのでなくなるとまずいです。1996年から2006年まで比較をして、どのくらい伐採されたかを調べてみると、この赤いところが10年間で伐採された場所です。アマゾンだけでも、この消滅分というのは、ポルトガルの国土の2倍、森がなくなっているということです。

<スライド>

シベリアでは乾燥が続きますので、森林火災が起きます。こちらに向かって煙が流れています。火災が起きる、二酸化炭素が出る、そうすると温暖化する。ますます熱くなって火災が起きる。悪循環が起きています。

<スライド>

そして、日本のそばの中国からは大気汚染です。こ

ういうものが、アジアのほうからこちらに向かって流れているということです。汚染が国境を越えている、決して自分だけのものではなくて、国境を越えた健康問題も出てきているということです。こういうふうな状況が、今、続いています。

上から見ると、もう暗澹としてしまうようなことですが、実はまだあります。だから今日は、脅かしに来てしまったような感じなのですが、脅かしになってしまわざるを得ないのです。

でもこれは入り口です。さあ、これから先いったいどうなるのか。日本には、こういう地球シミュレータという巨大なスーパーコンピュータがあります。これが、これから100年後の地球を予測しました。それをこれから、ご覧ください。

<VTR>

これは、これから100年後の地球の温度の変化です。1960年ぐらいから2000年まで行きます。赤いところが、温度が上がる場所です。まだ現代になっていません。最初のころはのんきなものですね。所々赤いのは、主に人間活動の二酸化炭素による温暖化と見ていいと思いますけれども、だんだん赤い部分、気温が上昇してきています。特に北半球の高緯度の上昇が非常に激しいですね。

アジアのあたりも赤くなってきました。だんだん赤くなってきました。南米も出てきました。こちらのヨーロッパだとか、日本のあたりは頭から赤いですよね。このあたりが随分と変化が起きています。1968年、1969年、1970年と、全般的に真っ赤になって、上の白いところは、赤では表示できないぐらいの温度上昇ということですね。こういうふうには、100年後の地球は、気温が上昇していくだろうということです。

さあこれは、それに伴った雨の量をあらわしたものです。青いところが雨が降る、赤いところは乾燥地帯です。温暖化なので熱くなるだけかと思ったら、計算してみるとそうではありませんでした。この青いところが、赤道あたりと高緯度のところに集中して、そのあいだに赤いところ、亜熱帯のところが乾燥しています。熱帯と中高緯度が、雨が降って洪水が起きる。亜

熱帯は乾燥していく。ですから、アメリカのこのあたりは乾燥地帯になります。アメリカの農業は、これからのものすごくまずいのです。こういう状況になります。

中国はというと、大ざっぱにいきますと、南が大雨、北が乾燥。日本は、西日本・南日本が大雨、東北が乾燥。しかし、降れば土砂降り。そういう状況です。予測不能の非常に激しい変動が起きるということで、おそらくこういう状況になっていきますと、未来の農業は混乱して、経済活動も混乱するだろうと思います。農業は、一定の気候でなければできないということです。

加速、複雑化する地球温暖化 —人類は見たこともない経験をする—

さて、ここまで見ていただいたうえで、今日ぜひお話ししたかったのは、温暖化、温暖化というのだけれども、実はこれはものすごく複雑な現象だということをお伝えしたいと思います。

なぜかというと、この北極の様子を見たらわかります。この北極の氷のものすごい現象というのは、どうも理屈だけではわからないのです。氷が、1980年ごろからずっと温暖化に伴って減ってきたのですが、1996年で激減しているわけです、どかんと減っています。いったい何が起きたのでしょうか。温暖化の傾向だけでは、こういう現象は起きません。今、世界の科学者は、それがどうしてなのかということを調べているわけですね。答えは、北極の独特の環境にありました。

南極の氷は、2千メートルぐらい厚い氷が地べたの上にあるのですが、北極は海の上に、平均2メートルぐらいの氷が浮いているだけなのです。ですから、ちょっとした変化を即座に受けて、非常に敏感に反応する場所だということです。

<スライド>

そして調べました。宇宙から見ると、これは北極海の氷です。氷が右に回転しているのが見えてきました。これは、もともと北極の氷というのは、動かないはずだったのですが、きっかけはこのあたりにすき間ができて、氷が割れ始めまして、海の流れに沿って大きな右回転が始まって、動く海になったということが観測されたわけです。

<スライド>

これを見てみますと、氷が動きだした以降に、北極海が熱くなっていますね。どういうことかといいますと、北極海の氷が右回転で動きますと、これがポンプの役割をしまして、ぐるぐる回ります。そして、南にある暖かい太平洋の水が、この北極海に向かって流れ込むという現象のようなのです。だから、ここの温度が一気に上がって、氷が溶けていく。ですから、相乗効果で氷が一気になくなってきたのではないかと考えなければなりません。これは本当に最近わかってきたことで、数日前にその研究者が日本に戻ってきました。



暖かい太平洋の水が、北極海に向かって流れ込み、氷が溶けていく。

もうひとつ理由がありました。ここがさっきの右回転ですが、これはさらに広いところですよ。よく見ますと、この上のこのへん、氷が大西洋のほうに向かって流れ出していることがわかりました。どういうことかといいますと、温暖化が進んだので、シベリアあたりの地べたが暖かくなるので、上昇気流が生まれて、低気圧になって、気圧配置が変わり、そしてこの緑の方向に恒常的な風が吹き出したのです。そうすると、海は温暖化で氷が減る、風はこっちに吹く、氷が外にどんどん出ていくということですね。これは、温暖化で引き起こされたもうひとつの現象が見つかったということです。

このように、地球温暖化の現象というのは、加速していくような複雑化していく状況になっています。特に「海」というものが絡むと、それが著しいのです。このあいだIPCC（気候変動に関する政府間パネル：Intergovernmental Panel on Climate Change）の報告が出ました。その報告のなかに、実はほとんどこの海のメカニズムは、まだ入っていません。ですから、次のIPCC五次報告が何年か後に出たとしたら、そのなかにこういうものの考えが入ると思います。ですから、その先生に「やばいんじゃないですか」と聞いたのですが、「やばい」ということです。「私たちは、見たことのないことを経験するかもしれない。それはまだ誰もわからない」ということです。

<スライド>

海は、いろいろなことが起きています。これは、全世界の海の0メートルから700メートルの、厚い海全体の水温の変化です。赤いところが温度が上昇。青いところは下降していますが、ほとんどが赤いところですよ。赤というのは何かというと、海は大気温を吸収して温まっていくのですが、このへんが全部温まっていますね。なんとその熱の吸収が、700メートルまでに及んでいるということです。表面だけではないということがわかりました。この膨大な量の水が温まると、まずは水の膨張が起こります。計算上は、海全体が3センチですが、実際は10センチ以上膨張して、水面が上がってきます。

水面の上昇というのは、海が膨張するのです。温かいものを熱くすると膨張しますけれども、水も膨張します。そういう現象がこれによって起きるということです。海は人間が排出した二酸化炭素の4分の1ぐらいは吸収するのですが、暖かくなると吸収できなくなります。それから二酸化炭素を吸収した分を酸性化するので、さらに吸収できなくなります。悪循環ですね。

もともと海というのは、「母なる海」ということで、海に全部やればなんとかしてくれる存在だったのですが、どうもこうやってみてみると、海の限界を超え始めているように見えます。

<スライド>

日本近辺の海は、水面温の上昇ですけども、このあたりの赤いところは上昇したところですね。世界で水面がプラス0.5度のところ、日本近辺ではプラス1.1度です。影響がさらに大きいということのようです。このような状況が報告されているということです。

<スライド>



海洋大循環の様子

そしてもうひとつ、この奇妙な絵は、地球の「海洋大循環」というものです。南極のような冷たいところから、塩分の多い水が海底に向かって流れて、沈み込む現象があるのですが、それがどんどんこういうベルト状に地球を移動して、ここで表面に出てくる。こちらは海底の5千メートルから6千メートルですけども、表面近くに出てきて、ずっと移動して、ここでまた潜り込んで戻ってくるという現象があるのです。

これは何がいかというと、この南極とかこのあた

りはものすごく栄養分が多いのです。栄養分が多いのを世界中に混ぜているわけです。もともと赤道のあたりの海というのは、栄養的にはとても貧しいのですが、世界中の海を豊かにしているエンジンのような役割をしています。

それから、この暖かい表層の温度を、ヨーロッパなどに運ぶので、気候をマイルドにして、暖かくしているということです。ですから、この大循環は、地球全体を住みやすく、マイルドな環境にする巨大なエンジンなのですが、日本の研究者がいろいろ調べると気になるデータが出てきました。このあたり3カ所、5千メートルぐらいの水温が、わずかに上昇しているわけです。「0.01 度ですか」と言ったら、先生に怒られました。ここの水温が上昇しているということは大変なことで、この潜り込みの動きが止まり始めているということだそうです。

もうひとつ仮説であるのは、このあたりの氷河の水が海にどんどん流れ込むと、塩分濃度が薄くなるので潜り込みにくくなり、今度は沈み込みの力も減るということです。そうすると、このありがたい大循環が止まる方向になってきているということです。

以前、こういう映画をご覧になったでしょうか。『デイ・アフター・トゥモロー』(The Day After Tomorrow)という、北半球が凍りづけになるSFでした。このような状況にはならないとは思いますが、方向としてはこういうようなことが起きる可能性がある現象です。専門家は、「決して見逃すことのできない現象だ」と警告しているわけです。ですから、とにかくそういうことを知らないと、どういう手を打てばいいかわからないということで、宇宙からの人工衛星というのはとても大切なわけです。これがないと、地球の健康診断ができないわけです。こういう衛星を日本も先進国も維持しなければいけないということが状況としてあるなかで、非常に深刻なというか、気になることが出てきました。

覚えていらっしゃるでしょうか、2007年1月に中国が、衛星破壊実験をやって騒がれたことがありました。どういう意味なのでしょう。実は、宇宙には「宇

宙ゴミ」というものがあって、宇宙にも環境問題があります。宇宙には、いろいろなロケットや人工衛星が上げられて、今まで6千ぐらいの人工衛星が打ち上げられているのですが、総量が数千トン打ち上がっています。うち上がったものは、中の燃料が爆発したり、ぶつかって粉々になったりする現象がありました。こういう粉々になったものはすべて「宇宙ゴミ」と呼ばれています。破片の大きさが数ミリから10メートルぐらいあります。この宇宙ゴミがとても問題になってきているというわけです。



宇宙ゴミの分布

<スライド>

どういうふうに問題なのかといいますと、まず地上に落ちてきます。これは実際に落ちてきたものです。300キロぐらいの燃料タンクがアメリカのテキサスに落ちてきています。落ちると危ない、当然そうです。だけど、もっと危ないのが実は、宇宙ゴミは落ちる前に地球の周りをぐるぐる回っているわけです。中国のことを言いましたが、昔の冷戦時代にソビエトとアメリカがやったのがほとんどです。こういう状況になってきましたので、ぶつかる衛星が破壊されるぐらいのエネルギーを持っているので「もうやめよう」ということになりました。以前は打ち上げて、それを破壊する実験をやっていたのですが、もうやめようと言ったはずなのに、中国がやったから怒ったのです。この真ん中の帯が、中国が実験をやったときのかげらです。そして、これが猛スピードで動きます。

<VTR>

これは宇宙ゴミの動いている状況をコンピュータ再現したものです。ちょっと倍速していますが、こういう状態で飛んでいます。スピードは秒速8キロ、鉄砲の弾は秒速数百メートルです。当たると衛星は木っ端みじんです。もう地球の周りには、こんなに宇宙ゴミが飛んでいるわけです。

では、どのくらいの破壊力があるのか、ちょっとVTRを見てみましょう。衝突実験秒速4キロ、半分のスピードでやってみました。小さなプラスチックの固まりを4センチのアルミ合金へぶつけてみます。

<VTR>

これは秒速4キロで、3.6グラムのプラスチックをアルミ合金に向かって発射する実験ですね。



宇宙ゴミの破壊力実験で、貫通してできた穴

いろいろ条件を変えていきますと、こういうふうに貫通してしまうわけです。これは、さっきの秒速8キロの半分でやった実験です。そういう状況ですので、この宇宙ゴミを避けるように計算しているいろいろなといけないのですが、これ以上増やしてはならないと、どのくらいで落ちてくるのか九州大学の花田さんのところで計算をしてもらいました。そうすると、宇宙ゴミは地球の周り、外側の静止衛星「ひまわり」などが飛んでいるところに多くあるのですが、高さによって地球に落ちてくる時間が違います。場所によって、非常に不規則な動きをしていますが、1千キロメートルで2千年、600キロで25年から30年、200キロで1日から4日ということです。

ですから、上のほうで飛んでいるものは、2千年は落ちてこないのです。逆に言うと、2千年後に落ちて

くるといことですね。人間がやってきた宇宙の環境問題というものが、すごく根深いものだということを示すものだと思いますけれども、これを申し上げたかったのは、地球の環境を守るために、われわれが持たなければいけない地球観測衛星が、こういう宇宙の環境問題によって、稼働できなくなるという非常に矛盾した状況があるわけです。これは人類規模の問題で、今、国連で問題になっていまして、これをどういうふうにするのか、どういうふうに減らしていけるのかと、ロケットをあげて掃除していくようなことができないかとか、あるいは大きいものについては、シミュレーションをして、実際にシャトルなどをあげるときには大きいものがわかりますので、それを避ける軌道で打ち上げているわけですね。しかし、これ以上増えてくると、われわれは宇宙に出ていけなくなります。

私はテレビでも話をしたのですが、そのときは中国に対して、非常に憤りを覚えたのです。われわれの文化をいただいた大切な国だけれども、中国がやったことは、軍事力が宇宙空間を牛耳ってしまったと。宇宙というのは、軍事のためにだけあるのではない、地球がそうであるように、私たちの経済だとか、子どもを育てる教育の場であったり、文化であったり、そういう非常に豊かな人間活動をする場であるはずなんです。しかし、それを軍事的な都合によって封じ込める、進出できなくさせるということは、やはりおかしいと。これは、中国だからではなくて、アメリカも旧ソ連も、すべてそうだと思いますけれども、人間は好奇心の生き物だし、行動範囲を広げていくわけですから、これから宇宙に必ず出ていきます。宇宙文明が始まります。そのときに、宇宙に活路を見いだしていく道を自らが断つというのは、これは愚かなことだということですね。そういうような目で、この宇宙の環境問題をとらえなければいけないのではないかと思います。

**実現しなければならない京都議定書
—循環型社会をどうつくるのか—**

さて、そういう状況がいろいろあるなかで、この温暖化をどうするのかということ、ご存じの京都会議が始まったと、こういう構図になっています。1997年に

京都によって、国際的に何か対策をしましょうという約束が成されたわけです。各国は義務を負いました。日本の義務は、1990年に比べて、来年の2008年から5年間、二酸化炭素のような温暖化効果ガスを6%減らすというのが、わが国の約束です。

計算をしていますと、2005年はプラス8%でした。約束の6%と比べますと、あとマイナス14.1%減らさなければいけない。しかし、むしろ今は増えている。約束は来年からです。どうするのだということです。

カナダは、早々に白旗を揚げました。このあいだ日本のある学者は、「日本も白旗を揚げたほうがいいのではないか」と言っていました。だけど、欧米の人に聞いたら、京都で決めた国際的な約束に対して、日本がそういう態度をとると、日本の信用はもう落ちてしまう、完全に落ちると他国は言うことを聞かなくなるだろうと言っていました。それから取り決めて、そういうふうには実現できない国には、さらにその次にもっと多いペナルティーが加えられる約束になっています。

ですから日本は、これをなんとか実現しなければいけない。京都議定書どころか、このあとをどうするかを今、問題にしているわけです。この京都議定書というのは、まだ入り口なのです。このあとどうするかが大問題なのです。まだ中国も動いていない。アメリカもご存じのとおり。一部の国がやっているだけです。だけど、このあと中国やインドやアメリカも含めた巨大な国が動かないと、地球はアウトなわけです。このあとのポスト京都議定書をどうするのだという議論が、今ものすごく始まっていて、この12月もインドネシアで議論が始まるなかで、京都議定書はもう入り口なので、やらないといけないうのにこの体たらくという状態です。そういうことに直面しています。

循環型社会をどうつくるのかということです。今日も分科会で議論されたと思いますけれども、私たちは生きていかなければいけないので、経済活動をしなくてはならない。そうすると、持続可能な発展、経済活動しながら、環境も守れるような道筋を追究しなければいけない。そういうまちや都市や国をつくらなければいけない。ものが循環していく社会ですね。

最初にご覧いただいたこのカプセルのように、もともと地球はこういう循環型のシステムです。できるだけ、これに近づくような、地球に負荷を与えないようなシステムをどうやったらつくれるのかということが、今問われているということです。

今日は、宇宙から見た地球を語れということなので、解決策については申しませんが、科学技術のほうでもいろいろなことが今模索されているわけです。ここに書いているような、風力発電だとか、太陽光発電とか、バイオマスなどの自然エネルギーを使うというようなものもあるわけです。議論が分かれますけれども、ある研究によると、風のエネルギーというのは、吹いている風を全部うまく使うと、100億人、日本国土の50%のエネルギーが、風だけで賄われるという計算もあります。反論する人もいますが、そのくらい巨大だということです。

この太陽光も巨大なエネルギーです。バイオマスもそうです。最近出てきているのは、燃料電池とか、こういうものですね。これは、水素を使って発電するので、二酸化炭素が全然出ません。車はいまいちですが、家庭用の燃料電池がだいぶ出てきました。いいバッテリーで電気自動車というものが出てきたりして、これもあと2、3年で実用化すると思いますけれども、こういうこともやっています。あと問題は、原子力発電所をどうするかというのは大議論だと思います。

とにかく、あの手この手でやらなければいけません。こういうものも最近出てきています。ミニ水力発電です。農業用水路のところに、小さな発電機が付いてあって、工場の出口などにも付ける。そうすると、小さいですが発電をします。ですから、自分のところで発電をして、自分のところで使うというエネルギーの地産地消ですね。

先ほどの燃料電池も同じですが、自分の地域で発電して、自分のところで使う。だから、巨大なエネルギーを使って、延々運ぶ必要がない、その地域のエネルギーを地域が使う。これは、食料なども同じような状況になっていますけれども、こうなると社会構造が変わってきます。これはしかし、考えてみると大ごとです

ね。私たちの生活のフレームが変わります。もしかしたら、そこまでやらないと解決できないかもしれないわけです。

<スライド>

「市民意識の持続」

一子どもに伝える生き延びていくための知恵一

私たちNHKでは、去年12月末に、朝まで生解説という本当にしんどいことをやりまして、真ん中の赤いのが私ですけど、解説委員が全員出て、朝まで大議論をするという非人間的な番組をやったのですが、この環境を深夜からやりました。いろいろな意見が出ました。科学もあれば経済もあれば、いろいろな立場の人たちです。大議論になりました。

例えば、炭素税というのをやるのかやらないのか。こっちの方は経済解説委員ですね。こちらは環境派・科学ですね。「やるべし」と言ったら、「そんなことをやったら経済は駄目になる」と、「やるべきではない」。こっちでは、「こうなるともう原発をやらざるを得ない」と、「いや、そんなことをやった危ない」という議論になります。

京都議定書路線そのものがおかしいと。日本がヨーロッパの論理に乗せられたのだというような考え。いや、そうではないと、やはりそういうような路線をキープしなければいけない。もうどれをやっても、議論議論で、NHKの解説委員がのしりあいまでは行きませんが、ものすごい議論になって、結論が出ませんでした。もともと結論は出るわけないと思いましたが、いずれにしても、国や行政の強いリーダーシップのなかでフレームを決めていかなければいけないということをみんなで確認したあと、全員が賛成したことがありました。

それは、「市民意識の持続」というものがベースになると、どれをやっても駄目だということでした。市民がその気になって、続ける意識がなければ、いくら旗を振っても駄目だと。これは当然といえば、当然のことですね。今回のこの会が、まさにその会だと、うかがっておりますけれども、市民のなかの心に、そういうようなことが起きないと駄目だと。みんなの暗い話

の果てに、もっと夢が欲しいねという話で番組は終わったわけです。私は、NHKがそれでいいのかと言いましたが、「だってそうじゃないか、夢が欲しい」。ポジティブにこれを進めていく、何か考え方が欲しいよねという話で終わりました。

私は毎週土曜日に、教育テレビの子どもたちや中山エミリちゃんと、『科学大好き土よう塾』という番組をやっています。最近、子どもと話していて、気になることがあります。私はそこでは塾長と呼ばれているのですが、「塾長、塾長、地球環境を守るためには、うんと、がまんしなきゃいけないんだよね」と言うのです。「ええっ！！どういうことなの」と聞いたら、「環境問題って、要するに車に乗りたいたけど乗っちゃいけないんだよね。食べ物も我慢しなきゃいけないんだよね。寒いけど、我慢しなきゃいけないんだよね。エレベーターに乗っちゃいけないんだよね。電気は暗くしてやらなきゃいけないんだよね。ものすごく暗い、苦しいことなんだよね」と言うのです。こういう子がときどきいます。

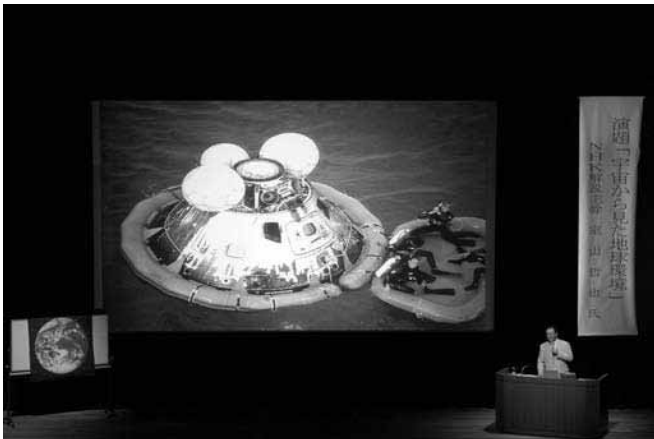
ちょっとこれはまずいのではと思うわけです。何か、この子たちに言うべきことは、そういうことではないのではと思うのです。今の状況をポジティブに、この子たちに伝える方法はないだろうかと思うわけです。例えば、車に乗れないと言うけれども、自転車に乗ってごらんと、ものすごく気持ちがいいよと。歩くと、すごい気持ちがいいよと。エアコンがない、汗が出る。汗をかくと気持ちがいいよと。風に当たると気持ちがいいんだよと。生きているってすごいよと。人間の体にそういうものがあるんだと。自然はそういうふうになっているし、気温が上昇したり、下降したりすると、風が吹いて、私たちが癒やしてくれるのだということを、子どもにまず教えるべきではないでしょうか。

それが、その地球というもののすごさに感動することだし、生きていることのありがたさを感じることだし、そのフレームの上にもものごとがないと、我慢我慢でやっていくようなものが長続きするわけがないと思います。生き延びていくための知恵のようなものを子どもに伝えなければいけないと思います。

ではこれをどうするのだといわれると、私も昨日、東京から来たときに、新幹線に乗ってきたので、べつに自分で走ってきたわけではありません。やはり嫌でも乗らないと来られない。だけど、そういう今の社会をまわしていくシステムのなかで、何か今申し上げたような新しいものの考え方というか、新しい文明といえますか、そういうみちすじを見つけ出さないと、どうも未来はないのだと。どういう社会・法律・経済システム・教育システム・科学技術・子育て、あらゆるものの組み替えのなかで、どういう社会にしていけばいいのかということを考えなければいけない。私は、子どもたちにそういうことを考えさせる絶好のチャンスが、今日の前にあるのだと、自分で思い込むことにしています。

人間が、この温暖化現象というものを脳が発達して、ものをつくって、快楽を追い求めて、環境がここまでになったのならば、私たちの、このものを考える脳の知恵によって、それを克服することができるはずだと思うわけです。人間はそんなに愚かではないと信じたいわけです。

<スライド>



無事帰還したアポロ 13号

さて、最後の話です。私はこの話が好きなので、いつも話をするのですが、1970年に「アポロ 13号」というロケットが打ち上げられました。宇宙空間で大事故が起きました。酸素タンクが爆発しました。これは本物の写真です。中に人間が乗っています。燃料電池も発電できなくなって、二酸化炭素がどんどん増えて、

酸素が減ってきました。生存の危機です。もう絶望だと誰しも思いました。

<スライド>

これもそのときの写真ですが、航空宇宙局（NASA）のコントロールルームは、そのカプセルと交信をするなかで、カプセルと同じ環境をつくりだして、何をつくり出せばいいかを話し合いました。カプセルの中にあるホースだとか、木切れのようなものを出して、こうでもない、ああでもないということをやりました。カプセルの中でも、その交信と同じものをつくりました。手づくりです。

<スライド>

こんなふうな、張り付けたようなみともないものをつくって、大気を循環させようとしてしましたうまくいきました。二酸化炭素が減って、酸素が補給でき始めました。帰還することができました。私の友人に、立花隆という評論家がいるのですが、「アポロ計画のなかで、もっともアメリカからしかった事業はこの瞬間だ」と彼は言っています。何をやったのでしょうか。NASAが克服した、アポロ 13号のこのカプセル、私はこれを見て、何かに似ているなと思いました。これに似ています。

<スライド>

今、地球は同じ状況です。カプセルの中にあつたホースや木切れなど、ああいうものを寄せ集めて、コミュニケーションを取って、手づくりでしたけれども何かをつくり上げて、温暖化ガスを減らしていったあのプロセスは、この資源が限られている地球の上で生きていく私たちがやらなければいけないことと同じではないかなと思います。そう見れば、アポロ 13号は、私たちにもその実例を教えてくれたのかもしれないと思うわけです。

夢が欲しい、ポジティブに考えたい、私は映画が好きなので、こういう言葉が好きです。『サウンド・オブ・ミュージック』のなかに、こんな言葉がありました。

「神様が戸をお閉めになるときは、必ずどこかの窓を開けてくださるものだとマザーがいつも言っているわ」と。苦しいことがあるときに、必ず神様は、何か出

口というか、解決策を用意してくれていることを信じているという話ですね。私たちは、もうふん詰まりのようになっていますけれども、きっとこういうものがあるのではないかと思うわけです。

<スライド>

これは、アポロがかつて撮った、月面から見た地球です。まだ青く輝いています。

<スライド>

私たちの地球は1メートルのときに有限だと言いましたが、これは海王星、水金地火木土天海冥の冥王星は惑星から外れたので、太陽系の外からヴォイジャーが撮影した地球の写真です。あまり見たことのない写真だと思いますが、これが地球です。光を増幅しています。もう周りは何もありません。真っ黒けですね。何もありません。地球がこんなに孤独なのかということ 생각합니다。

最初に申し上げたことを繰り返します。私たちは、ここから逃げることはできません。どこにも行けません。この惑星の上で生きるしかないということです。逆に言うと、ありがたい存在だなと、この星に生まれてよかったなと、この星に生まれて、現代に生まれて、日本人に生まれて、岡山県倉敷市で生まれ育って、今日こういう会をやっていて、ありがたいことだと思うわけです。

いろいろなご縁のなかで、私たちの命が、今はぐくまれているとすれば、この惑星の上で起きた物語だと思うわけです。その人たちが、今ここに集まって、同じことを考えているのも素晴らしいと思うわけですが、やはり私たちの子孫に向かって、この星を守って、自分たちの人間としての素晴らしいものを受け継いでほしいと思うのならば、何か始めなければいけないというふうに思います。だけど始めるときに、「我慢しなきゃいけないんだよね」ではない考え方、もっと明るくて、夢のあるやり方というものを一人ひとりが考えないと、どうもみちすじは見つからないのではないかなということ を最近思います。

結論が出なくても、今日はお宅に帰られたら、親子でお話し合いをしていただくということを望みたいと

思います。私の話は以上です。